大分市
歴史資料館ニュース
1994 3.31 26
Oita City Museum

松平近儔作 児島高徳像（当館蔵）

平成6年度行事案内

秋の特別展

豊かなる海 ― 瀬戸内と豊後

期間　1994年10月28日～11月27日

弥生時代から江戸時代までの瀬戸内と豊後の交流の歴史を紹介します。

テーマ展示

Ⅰ.府内の殿様 大給 松平氏

期間　1994年4月26日～6月25日

Ⅱ.新発見の遺跡・遺物

期間　1994年7月2日～9月24日

Ⅲ.南蛮文化とキリシタン

期間　1994年12月3日～1995年1月28日

Ⅳ.地図と写真にみる近代大分

期間　1995年2月4日～3月31日

新しく収集した資料を含めて、普段は展示していない収蔵品、ここ数年市内で発掘された考古遺物を公開します。

各種講座

■ふるさとの歴史講座

① 歴史のコース　期間1994年4月～6月
② 考古のコース　期間1994年7月～9月
③ 民俗のコース　期間1994年10月～12月
④ 古文書のコース　期間1995年1月～3月
（毎月第2～4土曜日　14時～15時30分）

■**史跡見学会**　8月実施予定

■**ジュニア講座**　竪穴式住居模型づくり
7月下旬　5日間

■**陶芸講座**　1995年1月　6日間

■**はた織講座**　1995年3月　5日間

■**ミュージアムシアター**
毎月第4日曜日　11時・13時・15時
歴史や文化財の映画を2本上映します。

以上の各種講座についての詳しいことはそのつど市報でお知らせします。

5年度の資料館あれこれ

編集後記にかえて

花咲く4月

歴史講座を開講。大友氏や柞原八幡宮関係の話を中心にした講議を皆さん熱心に受講。無事卒業しました。

風薫る5月

歴史と旅好きの皆さんと国東半島の史跡めぐりを行いました。

杵築市では、城下町やめずらしい平安時代の経塚跡を見学し、一同大感激。

冷夏の9月

台風13号に襲われ、資料館の屋根瓦が飛び国分寺金堂跡にあった市の名木で樹齢約700年の大杉が倒壊。ただ、人災がなく、不幸中の幸いでした。

ポルトガル友好450周年に賑わった10月

10月9日、秋晴れの昼下がり、高円宮・同妃殿下の御来館があり、市民の皆さんと共に歓迎の楽しいひと時でした。また、下旬に特別展「豊後の碩学 後藤碩田」を開催。知る人ぞ知る“碩田先生”を顕彰し、市民の方々にその業績を広く親しんでいただきました。

雪の多かった2月

高崎山の残雪を見ながら、中世城跡の金谷迫城を縄張り調査。

資料館ニュース　No.26
発行　1994.3.31
大分市歴史資料館
大分市大字国分960番地の1
〒870 ☎（0975）49－0880

金谷迫城跡を調査

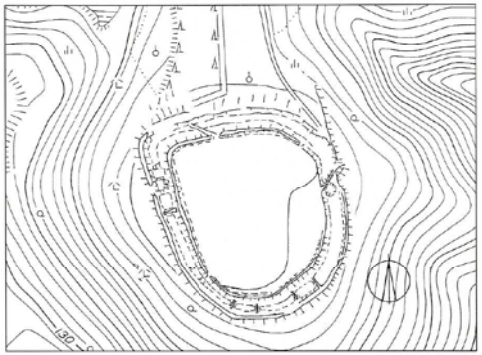
府内及び大友氏関係遺跡総合調査

資料館では、「府内及び大友氏関係遺跡総合調査」事業の一環として、2月11日～12日「城跡」研究でご活躍の東京都豊島区教育委員会の橋口定志氏、千葉県文化財センターの柴田龍司氏をお招きし、大分市金谷迫にある城跡の調査を行いました。

この城跡は、明治時代の『雉城雑志』という本に「丸山城跡」として紹介されています。現在主郭にあたる部分が墓地となっていますが、周囲に築かれた空堀・土塁の遺構が大変よく残っています。

今回の調査で、地表から採集された磁器片から16世紀に築かれた遺構であることや、主郭以外に郭がみられず、しかも郭の北東・北西の両隅がほぼ直角に築かれていることから、居館（＝「方形館」）跡の可能性が高いことが分かりました。城跡から北西約300ｍの辺りに「土居ノ内」・「七ヤシキ」の字名が残っており、戦国の動乱期にこの地を治めていた土豪が防御のために新たに築いた居館とも考えられます。大友氏の在地支配を解明する上で貴重な事例とも考えられ、今後さらに検討を進めていきたいと思います。

調査風景



金谷迫城跡縄張図

表紙紹介

松平近儔作　児島高徳騎馬図

府内藩主松平近儔（ちかとも）が描いた絵。画題は「太平記 巻4 児島高徳が事」からとったものです。これは南北時代備前国（岡山県）の武士児島高徳が隠岐に流される後醍醐天皇を救おうとするが、警護のきびしさに断念し、せめて自分の志だけでも天皇に伝えようと、夜天皇の宿所に忍び込み、庭の桜に「天莫空勾践、時非無范蠡」（天、勾践をむなしうすることなかれ、ときに范蠡なきにしもあらず）との詩を刻んだという物語です。この詩は、中国の越王勾践（こうせん）は呉王に敗れて捕虜になったが、忠臣范蠡（はんれい）の励ましによって再起し、後日呉に大勝したという故事にちなみ、天皇に心を寄せる臣がいることを知らせたものです。翌朝庭におり詩を読んだ天皇はおおいに満足したといいます。

松平近儔は宝暦4年（1754）5代藩主近形の長子として生まれ、明和7年（1770）父の跡を継ぎ、6代藩主となりました。彼は当時府内を代表する文化人で、絵画・俳諧に優れていました。絵画は本図の他、親鸞上人画像、白鷹図など玄人はだしの作品が残されています。また、俳諧は江戸で雪中庵三世蓼太、完来に師事し、国許でも家臣等と句会を開いています。近儔の句は江戸で出版された俳諧集にも掲載されていますし、天明6年（1786）府内の俳人とともに俳諧額を柞原八幡宮に奉納したりしています。この額は今でも同宮の回廊にかけられています。

絹本着色　縦91.8×横38.5㎝　当館蔵

新収資料の紹介

井原西鶴「日本永代蔵」

今回は資料館が今年度購入した「日本永代蔵」を紹介しましょう。これは江戸時代の有名な作家井原西鶴が書いた小説で、貞享5年（1688）正月に出版されました。「大福新長者教」の副題が示すように、実在した全国の大金持ちを登場させ彼らがどのように富を築いていったか、また没落したかを虚構を交えながらおもしろおかしく描いています。

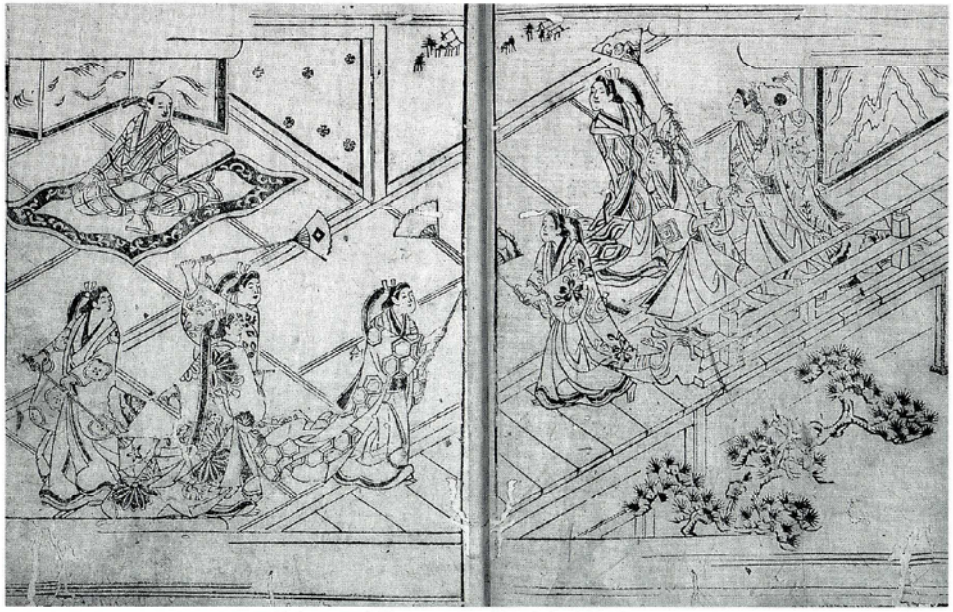
全6巻のうち、巻3の2に「国に移して風呂釜の大臣」と題して府内の豪商万屋三弥が登場しています。ここに描かれた三弥の活躍ぶりを見てみましょう。

三弥は父の死後三年間遺言から菜種を栽培することを思いつき、それで成功する方法ばかり考えていた。ある時郊外の荒地に菜種を蒔いてみると自然に実がなった。そこで10年間は無年貢にしてもらい、人を集めて耕作したところ成功し、海運業にも手を伸ばし西国一の長者になった。

母と京都に旅行したとき、その華やかさにあこがれ、美女12人を引き連れ府内に帰り、京風の大邸宅を作り、美女に扇合戦させるなど優雅に暮らした。しっかりお金の管理をしていた手代が亡くなると、京都から毎日名水を運ばせ風呂を沸かせるなど贅沢は極まり、ついに赤字となり、家は傾いた。

以上があらすじです。実はこの万屋三弥は江戸時代初期に実在した府内城下の守田山弥之助がモデルとなっています。彼は山弥長者伝説のモデルとしても有名です。伝説によれば、友達から買った夢を頼りに金山を掘り当て財をなし、城下に大邸宅を構え栄華を極めたが、あまりの傲慢ぶりに藩主により一族全員処罰されたと言います。

彼の実像は、西鶴の虚飾や伝説のベールに包まれはっきりしません。ただ、鉱山経営で富をなし、初期府内藩の特権豪商として名をはせていたようです。しかし、藩政が固まる時代の流れのなかで、古いタイプの商人として排除されたのでしょう。現在大智寺に三弥之助の墓が残っています。



風呂釜大臣 扇合戦をみる図（「日本永代蔵」巻3の2より）

テーマ展示から

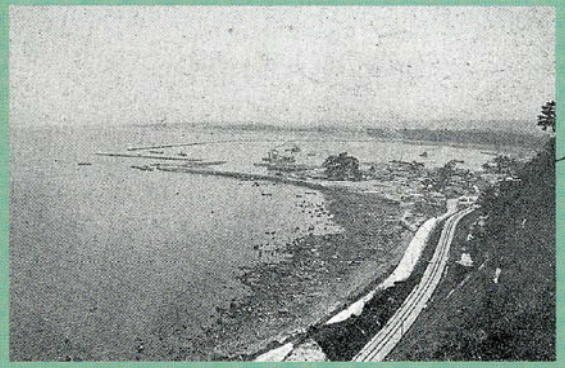
大正10年頃の大分市

2月～3月「古地図にみる大分」と題して江戸時代から昭和20年代までの絵図や地図を集めたテーマ展示を行いました。今回は大正10年の大分市街図を中心に当時の姿を再現してみました。この年人口は約46,000人、戸数約7,300戸。ちなみに現在は人口約42万人、世帯数約152,000世帯です。

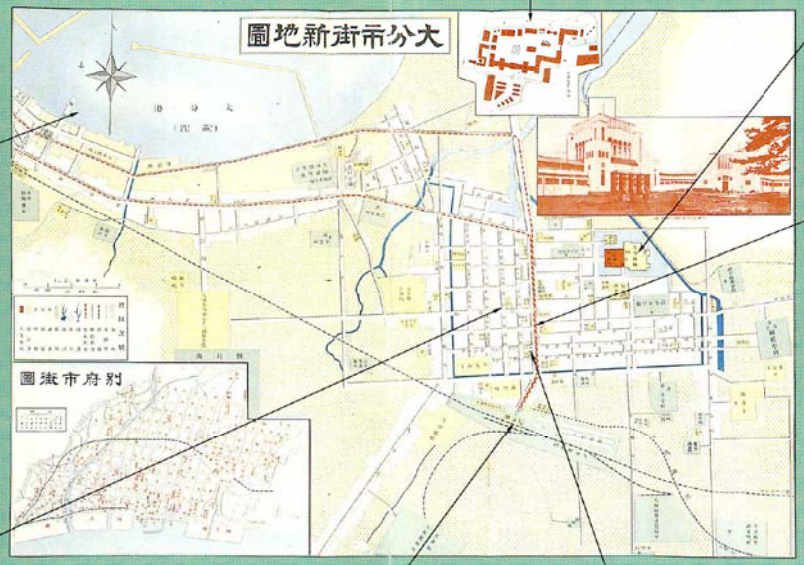
また、大分県庁と新川海岸を会場にして九州沖縄八県連合共進会が開かれています。これは各県の産業や物産を紹介する博覧会で、60日の会期中入場者が98万人をこえ、大分市始まって以来の大イベントだったようです。

共進会新川会場　約18haの敷地に各種物産館の他、美術館や水族館もあった。（共進会『記念写真帖』より）

大分県庁　白壁の向こうにみえるのがそれ。府内城跡（城址公園）にあった。共進会の第1会場も兼ねる目的で、大正10年完成した。府内城から現在地に移転したのは昭和37年である。（共進会『記念写真帖より』）

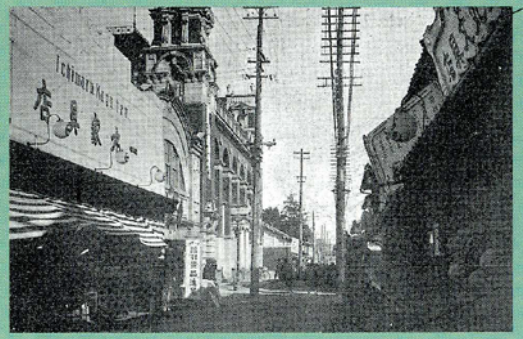


大分港　明治17年かんたんに港が造られた。しかし、大型汽船が入港できなかったため、同45年から拡張整備され、大正4年に完成。2000トン級汽船が横付けできる港となった。（『大分市案内』より）



大正10年 大分市街図

碩田橋通（電車通り）　現在の中央通。道路の真ん中を走るチンチン電車は明治33年の開業で、全国6番目という早さだった。右手前は旧二十三銀行本店（赤レンガ館）。大正2年に完成したルネサンス式建築で、町の近代化の象徴だった。（『大分市案内』より）



竹町通り　西から東をみる。左手「一丸家具店」の奥に見える洋風建築は大正4年に新築された旧大分銀行本店。（『大分市案内』より）

開業当時の大分駅　大分市に鉄道が開通したのは明治44年。当時門司まで約6時間かかっていた。のち日豊線が南に延長、豊肥線・久大線も建設され、大分駅は鉄道の拠点となった。（『大正初期大分写真帖』より）

大分市役所　大正6年東上市町（中央町1丁目）に新築された。木造建築で小さいのに驚く。この庁舎も昭和7年火災にあい、同12年現在地に移転した。（『大分市案内』より）

展示資料から見る大分の歴史

第４回 鹿笛の話　その１ ―大友家の鹿笛―

今回は趣を変えて鹿笛の話をしましょう。昨年秋に資料館が開催した特別展「豊後の博学 後藤碩田」をご覧になりましたか。その折、碩田が書いた鹿笛のスケッチを展示していました。

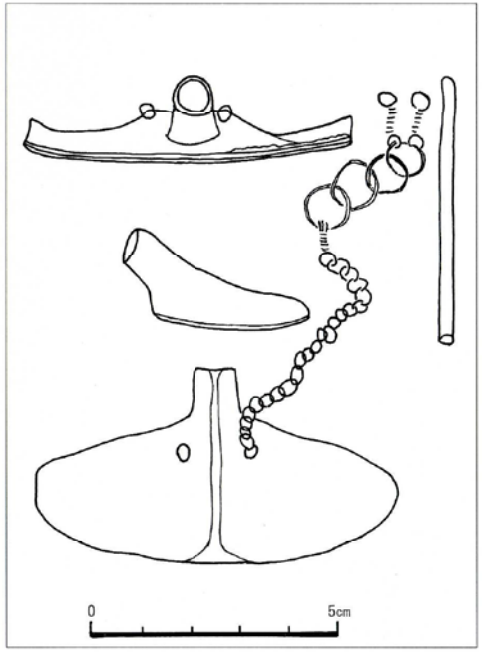
スケッチの載っている「尚古延寿」は、考古遺物や古器物、古文書などを書きためたもので、碩田の代表的な著作の一つです。この鹿笛は肥後松野家の馬具とともに描かれており、大友初代能直の遺品で、能直が富士の巻狩で使用したとされています。

松野家は1593年豊後国を追われた大友22代義統の子正照を祖とし、江戸時代肥後細川氏に仕えていた家です。ここに描かれた遺品は現在所在不明ですが、大正４年刊の『大分市史』に他の品々とともに大友家遺物として写真が載っています。これらの遺品は、明治時代になって東京に移住した松野直友が大友祖霊社建設のあかつきに社宝とするため、大分に残していったと思われます。その時の日録（明治廿三年 発起人日野幸顕他）には「銘松風鹿笛　袋入　由緒記載ノ巻物　壹個」とあり、松風という銘をもった由緒ある鹿笛であることがわかります。大分市史には「髻」という銘も書かれています。

江戸時代に書かれた大友家の歴史書「大友興廃記」「筑紫軍記」に、大友宗麟と鹿笛の事についての記載があります。宗麟は狩猟を大変好み、1574年秋津久見山で「笛野」（鹿狩り）をする際、佐伯床木村の六郎五郎という鹿笛の名手を召し出したと言います。

碩田の描いた鹿笛は、体部幅7.3㎝、高さ４㎝、吹口径0.8㎝で、現在民俗例として残る鹿笛とほぼ同じ大きさです。碩田はスケッチといっても実大で描いたようです。鹿笛の本体は木で作られ、赤く塗られています。中央に吹口にかけて稜線を作り、その両側は窪んでいます。また、周縁には浅い溝がめぐり、吹口基部にあけた小孔にクサリ（長さ１尺５寸）がつけられています。図には「裏牛角」との注記があります。これは、本来弁として張られている皮が白っぽく固くなっていたため牛角と誤認したのでしょう。また、鹿笛の傍らに長さ5.4㎝の細い棒が描かれています。さきほど触れた日録に「袋入」とありますから、この棒も鹿笛と一緒に袋に入っていたのでしょう。民俗例でもやはり、鹿笛本体、紐（図ではクサリ）、小さな棒、袋がセットになっています。大友家の鹿笛とよく似たものが、民俗例として大分県内に残っています。材質は木製や骨（鹿角）製などさまざまですが、体部が赤く塗られた例も多いようです。付属している棒状のものは、楊枝のように先が尖ったものや、ヘラ状のものがあります。尖っているのは主に吹口、ヘラ状のものは主に弁の部分を掃除するために用います。しかし、大友家のものは単なる棒として描かれており、本当にそうであったのか、碩田の観察間違いなのかわかりません。

さて、鹿笛とは何なのかについては、次回お話しましょう。



「尚古延寿」に描かれた鹿笛図

江戸時代の複製品製作

岡藩踏絵改鋳事件

今年度国指定文化財の真鍮踏絵・十字架上のキリスト像（東京国立博物館蔵）の複製品を製作しました。これは長崎奉行所で使用されていたもので、明治時代に東京帝室博物館に移され現在にいたっています。

江戸時代、キリシタン取締りのためキリストやマリアの画像を踏ませ、信者かどうか調べていました。これを「絵踏」といい、踏ませた絵を「踏絵」と呼んでいます。

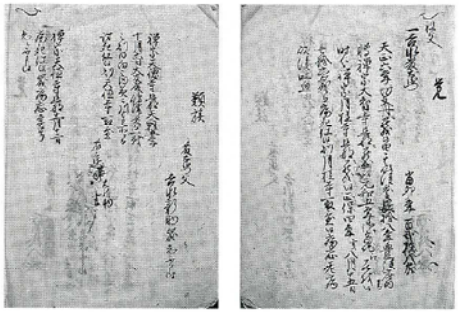
さて、豊後で踏絵の複製品が作られたのは、今回が初めてではありません。実は江戸時代岡藩がやはり長崎奉行所の踏絵を複製し事件となっているのです。

府内藩を初め豊後各藩では絵踏をする時長崎奉行所から踏絵を借用していました。岡藩でも1660年以来借用していたのですが事件が起きた1671年には借りていなかったようです。この年７月長崎奉行を訪問した岡藩の宗旨奉行柘植新右衛門は、どうして借りにこないのかと言われ、２枚の踏絵を借用し帰国しました。藩に戻った新右衛門が家老に報告し踏絵を見せたところ、家老はその見事さに感嘆し、協議して領内の鉄砲鍛冶に数個の複製を鋳造させました。この無断複製を知った長崎奉行は激怒し、詰問状を送りつけます。窮地にたたされた岡藩は長崎奉行へ謝罪の使者を遣わして複製した踏絵を提出、三家老と新右衛門を閉門処分とし、幕府の処置を待ちました。そして、ようやく12月に幕府の赦免が決まり、４名は閉門をとかれました。

以上が事件の顛末です。岡藩が複製した踏絵の図柄はわかりません。しかし、事件の２年前に真鍮踏絵が新しく鋳造され、新右衛門が奉行から踏絵を見せられた時「藩で使っている踏絵は女仏」と答えていることからすると、今回製作した「十字架上のキリスト像」だったかもしれません。

江戸時代、踏絵はキリスト教禁令のため厳しく管理されていました、事情は違いますが、今も昔も無断複製はご法度なのです。

真鍮踏絵（複製）



転井類族之書出

類族制度とは

キリスト教禁止政策の中で、弾圧されたのは信者本人だけではなかった。たとえ転宗（転び）しても本人はもちろん家族や子孫まで類族と呼ばれ、日常生活において常に厳しく監視されていた。誕生から死亡まで、ことある度に類族であるため届出が必要であった。そして、幕府や藩では類族を把握するため「類族帳」という書類を作っていた。

上の写真は、1687年臼杵藩士吉永藤右衛門が自分の曾祖父から子供まで５代にわたり一族17名を書き上げた書類である。彼の一族は40年前に死亡した祖父がキリシタンだったため類族となったのである。